

森尻 理恵 歌集

『虹の表紙』

〈青磁社 二、五〇〇円(税別)〉

人並みの努力だけでは超えられず研究者の壁にわれもここまで

陽に疎き庭でも母は鉢植えをあちこち動かして花を咲かせる

癌よりも息子の入試が心配かと同世代らしき医師は笑いぬ

歌でしかものは言えない 誰も彼も言葉の裏には生活がある

手すさびに折り紙恐竜折りためてベッドサイドがにぎやかになる

「塔」に所属する作者の第三歌集。『グリーンフラッシュ』、『S坂』に続く

歌集である。二〇〇八年から二〇一九年二月頃までの四四九首が収められている。息子と共に歩む作者の姿が、物語のように伝わってくる。母親として、研究者として、患者として、それぞれの立場できちんと歌を詠んでいる。意欲的に生きる姿勢が見えて、好感の持てる歌集である。帯文は花山多佳子氏。

米山 和明

新刊・歌集

山田 泉 歌集

『乾いたパレット』

〈六花書林 二、〇〇〇円+税〉

作者は想像以上に多くの苦難を背負いながら前向きな視線と意識をもって日々を詠っている。日々の感慨、発見を素直な感性に基づき三十一文字に託している。「託すは大げさですよ」と返事がありそうな明るさがある。

作者の第一歌集は自分の気持ちに忠実に詠われたのであろう作品が溢れている。教員であり、若くして癌を患い入院生活も送った。そして短歌を志す切っ掛けであった母を東日本大震災で失った。深い悲しみは読みとれるのに重く暗くは詠われていない。不幸を押し付けたりしない。作者自身の生き方の表れなのかもしれないと感じた。

十文字に切り込み入れて甘夏の皮ひらく朝 我が身むきたし
船上にドボルザークの「新世界より」を
ながし母の望みし散骨をせり
転移なしと告げる外科医のうちとけて寺
山修司へ話題は変わる

安富 初江

惟任 将彦 歌集

『灰色の図書館』

〈書肆侃侃房 一、七〇〇円+税〉

解説の林和清によれば、近畿大学で塚本ゼミの歌会に参加して塚本邦雄最後の直弟子といわれた著者であるが、卒業後は海外に行っていたりしてしばらく遠ざかっていた。この歌集は、「玲瓏」入会後の二〇一二年から二〇一八年までの三〇五首をおさめた第一歌集である。少々難解な歌もあるが、本好きで孤独者だけでなく、野球やマラソン好きな好青年としての一面もうかがえて楽しめる。

引越の前夜書物の整理中行方不明になりし友あて
本棚の一冊抜けば湿り気のある文字たちが零れてあるも
原始人のごときスイング一生に何度したことだらう長嶋

宇宙から見ればわれらはみな鳥の住民たるを川辺にて知る
塾送迎バスが待ちあまる午後十時ハザードランプ灯しながら

川井 洋二

歌書